残酷なほど純粋な少女の内面告白
女を知るための教科書とも言われる『女生徒』

画ニメ『女生徒』は太宰治の短編小説『女生徒』が原作である。小説の初出は昭和14年。原作は当時の近衛首相の名前が出てくるなど、開戦前の不安定な空気を反映している。画ニメ版でも軍隊にいる従兄弟の話が出てくるので、時代設定はほぼ同じと見ていいだろう。

『女生徒』は、思春期の少女の一日を主人公自身の独白で綴ったもので、朝起きてから夜寝るまでの、平日の意識の流れを追っていく。

父がここ3年ほどの間に亡くなり、姉がすでに嫁いでいるため、母1人子1人の母子家庭であることをのぞけば、主人公はありふれた少女である。そうした家庭環境についての言及も多くはない。

作中に出てくる言葉は、若干の変更はあるもののすべて原作から引用されている。画ニメ作品として、どこを取り上げてどこを省略するか、その再構成によって新しい『女生徒』像を生み出したのが、今回監督を務めた映画監督・奥秀太郎だ。

簡単に言ってしまえば、原作の女生徒は画ニメ版の女生徒よりも観念的で鋭舌だ。例えば、画ニメ版で使われなかったこのような箇所。

「学校の修身を絶対に守っていると、その人はばかを取る。変人と言われる。出世しないで、いつも貧乏だ。嘘をつかない人なんて、あるかしら。あったら、その人は、永遠に敗北者だ」（太宰治『女生徒』より）

主人公がおしゃべりなのは、内的独白という小説形式に要請されたところもあるだろうが、それだけとも言いきれない事情が原作の成立過程にある。小説『女生徒』は、有明涼（あけのりょう）という太宰ファンの女性から送られてきた日記を元に作られた。現実の女生徒と、太宰の観念にある女生徒が合わさって出来たのが、原作の『女生徒』だったのだ。それを知ると、画ニメ版『女生徒』の生成も興味深く見えてくる。

まず脚本は「いつまでもお人形みたいならだでいたい」という無垢な少女像を基調に構成されている。一日の出来事とは直接関係のない「新ちゃん」のエピソードが、少しの省略もなく収録されていることからもそれが窺える。

とはいえ脚本以上に主人公の性格を決定しているのが、画家・江津匡士の描く美少女だ。無表情ともいえる少女像は、原作の女生徒のそそっかしさを抑制し、声優の淡々としたモノローグと、画ニメの特性である動きのない画もまた、主人公の奥深さの描出に一役買っている。

画ニメという新たな表現を得て、『女生徒』はさらに芳醇な香りを放つ。本作のモノローグを聞けば、その名文に改めて気付かされる。発話される名文の美しさを本作で味わって欲しい。

画ニメ『女生徒』は原作を活かしつつ、より現代的な少女を作り出した。いつの時代であれ、少女の感性が鋭敏で気まぐれであることは変わりない。そして「シンデレラ姫」はやがて「王子様」を見つけて、少女であることをやめるのだ。